
最後の最後に逢う運命

柊 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の最後に逢う運命

【Nコード】

N1062D

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

『紅に沈んだ言葉』から二年後。由宇は決心した。選ばなければならぬ。どちらか、どちらでもないのか。それは、最後の最後に気付いた本心だった。

1・そう、決めたから

『由宇が好き』

付き合っていると思っていた二人から突然告白された。

クラス、ひいては学年中で容姿が整っていると認められている美男美女の二人と友人になったのはその数日前。

それから厄介な事件に巻き込まれて、それが解決したその日の帰りに言われた。そのとき、思わず「友達から始めよう」と言ってしまったのは記憶に深く残っている。

ただ、答えを先延ばしにしたにすぎない。

まだ、答えを出せずにぬるま湯に浸かっている。

「二年…か」

夢で見た過去は目覚めても鮮明だった。忘れたことなんてない。毎日会っているのに二人は文句一つ言わなかった。だから、このままではいかなかった。

しかし、いつか終わりがくることはわかっている。

そのとき、二人が離れていっても後悔しない心の準備がしたかった。二年経った今でも、僕を好きだと言ってくれるとは限らない。

今は、本当にただの友達にすぎない。

「由宇、須賀由宇、法学部一年の須賀由宇……」

「起きてるよ」

だんだんと詳しくなってくる僕の説明を打ち切った。

思い出した。今、僕は高校からの、『あの事件』から仲良くなった、今では親友の真弓夏目と同居している。といっても、それは一時的な同居だった。高校三年のときに夏目の両親が亡くなってから、度々夏目は不安定になった。精神的にも肉体的にも何かに追い詰められているように感じられる、そんな不安定さ。それが自分にも痛

かった。

それは時が経つにつれて間隔は大きくなっていたが、まだ完全ではない。そんなとき、僕は夏目が壊れないように側にいることにした。たとえ、それが自己満足であつたとしても。

今回、数日前に夏目の両親の命日があつたため、一緒にいた。夏目は落ち着いたようだったので、今日家に帰る予定だ。

「今日の朝ご飯は何？」

「智哉さん直伝の和食です」

部屋を出たすぐのところに簡易テーブルと四脚の椅子が設置されていた。テーブルに並んだ小鉢には、煮物、煮魚、和え物など和食で占められている。茶碗には炊きたてのご飯がよそつてあり、お碗は赤味噌の味噌汁が湯氣を立てていた。夏目はすでに座って待っている。

僕に告白した一人、周防智哉。彼は和食を得意としている。男から告白されたことはこの際関係ない。『付き合っていたと思つていた二人』ということに衝撃を受け、先入観が変に邪魔をして、智哉が男だというのは気にかからなかった。

「…そろそろ決着をつけないといけないのかもしれない」

「小百合さんと智哉さんのことですか？」

夏目の問いに頷きだけで答えた。夏目の丁寧な言葉遣いにほつとした。これがいつも通り。それが変わるなんて考えたくなかった。

夏目の向かいの椅子に座り、両手を合わせて「いただきます」を言つてから味噌汁に口を付け、一口飲んだ。温かさが身体に染み渡るのを感じる。

「周防智哉、諏訪小百合。今でも僕を好きなのかな」

「疑うのは止めたんじゃないんですか」

「疑うのはね」

曖昧な返答に、夏目は怪訝な顔をしただけだった。自分でもよくわかっていないのだから、明確な答えなど出せるはずもない。疑うことは確かに止めた。しかし、疑問は残っている。信じてはいるが、

心のどこかで不安に感じている。

これは朝の食卓に上る話ではない。夏目を不安にさせる要素は極力避けるべきだ。どうせ、嫌でも大学に行けば二人に会う。

「今日は学祭だったよね」

「そうです。由宇、話を戻して悪いんですが、これは言うておくべきだと思えますので」

夏目は硬い表情で、目線を下へと遣った。言い難い内容なのは想像に難くない。

夏目が話し出すまで気長に待つことにした。おかずも温かい内に食べるに限ることだし。もぐもぐと口を動かしていると、夏目の息を吸う音が聞こえた。

「また厄介なことになりそうです」

「何？」

「あの事件に類似するような」

夏目が、言い難いが言うておくべきだと判断した理由がわかった。この場合、『あの事件』が指すのは一つだけだ。

夢で見た、四人を結びつけることになった事件。

「全て噂なんです。小百合さんと智哉さんは付き合っている。僕と由宇は一緒に住んでいてデキている。小百合さんと智哉さんと僕は由宇に同情して一緒に行動している。…由宇は邪魔だ、と」

「見事に類似しているね」

素直な感想だった。不快に思う前に、二年前に似すぎているところに驚いた。不快に思っていないことに安心したのか、夏目は薄く笑った。夏目も整った顔立ちで、好青年を地でいっている。智哉と小百合といっても僕よりは不自然ではないだろう。僕は「凡人」の域を出ていない。それが周りには不満なのだ。また、それが引き金となって誰かを苦しめるのだろうか。

その誰かは、僕であればいいのに。

「あのときは、僕が智哉と小百合の友達になったのが気に入らなかった、とかだったような」

「そうですね」

『あの事件』を簡単に言ってしまうえば、皆『言葉』に惑わされただけだった。『今できることをやれ。自分のアイデンティティーを守るために』。思春期の生徒には麻薬のような言葉だった。悪いことを正当化する術として、それは働いた。そして、僕達は巻き込まれた。まずは夏目が八方美人というのが偽善だと難癖を付けられて犯人に仕立て上げられ、次に僕が小百合たちと一緒にいることが気に食わない人物、小百合と智哉のファンによって刃物で切られそうになった。結果的には小百合が事を収め、その事件が僕が智哉と小百合と一緒にいる理由になった。その後、二人の僕に対しての感情は友情ではなく恋愛感情だと知り、今に至っているわけだけど。夏目はそれより少し後で親友になった。

運命とは数奇なものだ、とつくづく思う。

「このことは二人も？」

「もちろん知っています。小百合さんなんて、由宇がいないときは冷たい笑みを浮かべたりしていますから」

明らかに怒っている。その様子が目に見えるようで、苦笑を浮かべた。夏目も困ったように笑い、それで、と続けた。

「今になって言ったのは、それが由宇に向かってきそうになったからです」

「…本当に決着をつける時期に差しかったということかな」

あの夢は前兆だったということか。水面下で進行していたことは、今になって僕を巻き込む。今まで隠していた三人の気遣いはわかるが、除け者にされていた感是否めない。

最後の最後、僕はどちらかを選べるのだろうか。

「夏目だけは離れないってことが救いだね」

「まあ、僕と由宇は家族みたいなものですから。ね、由宇お母さん」
夏目はよく僕との関係を『親子』と言う。確かに両親が亡くなったときに側にいた、代わりのようなものだったのだから、それは間違いいではない。しかし、何故「父」ではなく「母」なのか。…訊か

ない方が良くのかもしれない。

「由宇、決着をつけるといことですが、もう選んでいるといことですか？」

「まさか。決まっていたら二年も延ばしたりしない。でも、決めないと。それが二人を選ばないとい結論であつても」

もう二人を解放しなければならぬ。僕に告白したからとい鎖がどこかにある。だからこそ、二人はこの二年間誰とも付き合っていない。本当はもう僕に恋愛感情はなくても。

ぬるま湯は、出たときに嫌でも冷えを感じる。

「今日、全てを終わらせる」

『あの事件』を解決したとき、小百合が言ったことを真似た。

現在午前八時。残り時間は十六時間を切った。

2・学祭が、引き起こす

「おはよう、由宇、夏目くん」

小百合はいつもの待ち合わせ場所にいた。今日は淡い茶色の肩までのストレートの髪を、二つに分けて耳の横で一回巻いていた。比較的、どんな髪型でも似合うな、と今更ながらに感心した。

広い大学の敷地内には死角が多い。小百合一人が待っていたら声をかけてくる男は多いため、待ち合わせ場所は死角を利用して、あまり授業が入っていない校舎。そこは文学部である小百合と法学部である僕と夏目、そして経営学部の智哉にとって便が良い。

「おはようございます」

「おはよう。ありがとう、小百合」

感謝の言葉が続いたことに、小百合は首を傾げた。すぐに何のことかわかったようで、ニツと口の端を上げた。小百合の頭の回転の良さは『あの事件』のときから知っている。

小百合は両手を合わせて片目を瞑ってすまなそうな顔をした。身長は二センチくらい僕の方が高いだけだから、意識しての上目遣いだ。まあ、可愛い人には違いないけど。

「ごめんね、由宇。本当は水面下で終わらせたかったんだけど」

「その方が僕は嫌だったよ。僕は小百合や智哉、夏目が苦しんでいたのを知らないのは嫌だ」

「だけど、僕達は由宇が傷付くのが嫌なんだよ」

後ろから声が割って入った。振り向くまでもない。この声は智哉のものだ。

智哉の意見に同意するかのように小百合と夏目は深く頷いた。…何か照れるんですけど。決心が鈍りそうになるのを必死に堪えて、僕は溜息を吐いた。

智哉はそんな僕に何を思ったのか、顔を覗きこんできた。同じくらしいの背丈のため、簡単に顔を見られた。智哉の柔らかそうな少し

癖のある茶色の髪が軽く揺れる。大きい瞳は上目遣いに僕を見ていて、何も言えなかった。

本当に、智哉も小百合も何故僕なんかを好きになったのか。

「君たちには悪いけど、僕も足掻きたいからね。二年前の『あの事件』に似ているからこそ、余計に」

あのとき、僕は逃げた。小百合はあれは逃げではないと言ったが、それでも僕にとっては逃げに等しかった。悪意から目を逸らしたくて。そして、結末をこの目で見なかった。

全員揃ったところで、小百合を先頭に歩き出した。学祭は敷地の中心で行われている。僕達はサークルに入っていないので、何もすることは無い。別に今日学校に来なくても良かったのだけど、小百合が皆で回りたいというのでいつものように集まった。今日は小百合と夏目、僕と智哉で二列になって歩いている。夏目は身長が百八十センチあるため、小百合とは十センチ弱の差だ。後ろから見ると、二人は恋人同士のように見える。

「夏目くん、ありがとう。私が言うべきことなのに」

「いえ、僕で良かったんですよ。最近、近くにいたのは僕ですから」
小百合と夏目の会話が前から微かに聞こえた。これこそ、普通の友人のあるべき姿だ。僕のように母親のような存在ではなく、横に並んで歩ける存在。言葉の鎖がない関係。

僕は、二人と友達でさえないのかもしれない。

「由宇？」

「…何？」

「何を考えているのか知らないけど、一人で抱え込まないように。君ってホント、自分で何もかも背負い込みすぎるんだよ。それで小百合だって甘えてるんだろうけど」

小百合が甘えている？ 我が儘は甘えということだろうか。小百合の我が儘は無理強いではないため、別に不快感はない。

今回の学祭も、嫌ではなかった。決着をつけるのに好都合だ。
「すごいよねーあのランキング」

「あつ 諏訪さんと周防くんだ」

通りすがりの二人組はこちらに手を振った。小百合は猫を被った笑みを返し、智哉は無視を決め込んだ。四人でいて、知らない人から声を掛けられるのはいつものことだ。

しかし、『ランキング』という単語が気になった。その後が続いた『諏訪さんと周防くん』。その二つが結びついているのは間違いない。

「ランキング、見に行こうか？」

僕の提案に、小百合と夏目、智哉は一瞬動きを止めた。なるほど。これが原因か。なんとなく予想はつくけど、確かめるに越したことはない。

僕は小百合に、にっこりと笑みを向けた。

「僕一人でも見に行くよ？」

「一緒に行くわ。私も確かめたいし」

ね？ と小百合が夏目と智哉に同意を求めると、二人は頷いた。これで決まりだ。

小百合は場所がわかっているらしく、確かな足取りで向かっていった。それについて行く。

多くの人が集まっていた。人の多さは関係なく、ランキングははつきりと見えた。二階の窓から布が垂らしてあって、そこに大きく書かれている。順番に見ていくと、『部員が多い部活』『マニアックだと思ふサークル』などあり、進むにつれて個人に絞り込まれていた。最初に目に入ったのは、『お似合いカップル』だった。

一位は学生モデルをしている女性の名前があり、その相手の男性の名前も連記されていた。親切にも、名前の横には顔写真が貼られている。二位もレポーターとして地域のテレビ番組に出ている女性で、男性の名前が並んでいた。

そして三位に小百合と智哉の名前があった。モデルでもなく、テレビにも出ていないのに、ここに名前が挙がる。それほど二人は知られているということか。

「智哉ねー…カップルじゃなくて、ライバルなのに」

「そうだよな。有難迷惑、というよりただの迷惑」

呆れたように毒を吐く小百合と智哉は、互いに顔を見合わせて苦笑していた。高校生のときから、二人はお似合いだと言われ続けていた。今更、という感じもあるのだろう。顔写真も添付されているため、二人を知らない人までも知ることになる。

「まあ、傍から見れば『お似合いカップル』ですよな」

「夏目くん、他人事だと思ってるね」

くすくすと笑う夏目に、智哉は眉を寄せた。その光景は微笑ましい。夏目が僕を母親と誤っているように、僕は夏目を弟、もしくは子供のような家族視点で見ている。そんな家族が友達や他の人と仲良くしているのは嬉しかった。

次のランキングに進もうとしたとき、前から歩いてくる男女のグループと目が合った。逆の順番から見ているため、僕の知らないランキングを見たのだろう。一人が僕を見て露骨に表情を歪めた。

「あー確かに邪魔」

「なんか白けるよねー。ホモカップルが一緒にいると」

キヤハハ、と甲高い声で女性が笑ったのを合図に、周りにいた人も笑い出した。その笑い声は嘲りだ。そして、それは僕に向けられている。

3・わかつて、いたのに

小百合は智哉と腕を組み、そのグループに向かってにつこりと笑った。あ、作った笑顔だ。

「そこ、通らせてもらえる？」

「邪魔しないでよ」

小百合の意図がわかったのか、智哉も加勢した。嫌な笑い声を立てていた数人は、二人のその様子を見て大人しく道を譲った。三位という評価のことだけはあつた。

二人が通った後を、僕と夏目が続いた。女性が言っていた『ホモカップル』とは、僕と夏目のことだろう。

「お前、消えろよ」

通り過ぎるときに言われた。誰が言ったかはわからない。それに同調するかのように、邪魔、と違う人が小さな声で言った。

消えろ。存在を抹消しろということだろうか。それは『死ね』と同意語だ。

吐き気がする。人の悪意に接すると、それが体の中に溜まった。その悪意は、たとえ自分に対してもモノでなくても関係なく溜まっていくな。『あの事件』でも、僕は悪意を溜め込みすぎて、消化するのに時間がかかった。

ふと、振り返った小百合と目が合った。慌てて平気な顔を取り繕ったが遅かった。胸に手を置いているのにも気付いたのだろう。

小百合は綺麗な笑みを浮かべた。

「由宇と夏目くんは付き合っていないわよ。二人は私の友達。私の友達に失礼なことを言わないでね」

「僕からもお願いするよ」

珍しく智哉も笑顔を作った。僕から見れば、それは不本意で作った笑みだということがわかるが、他の人には綺麗な笑みに見える。

男女グループはバツが悪そうに僕達が来た方向へと歩いていった。

その姿を確かめると、小百合と智哉はすぐに腕を解いた。本当に、どこが『お似合いカップル』なのだろう。

『お似合いカップル』の隣にあったのは、『似合わないカップル』だった。丁寧に『似合わない』の下に括弧書きで『気持ち悪い』と付け加えられていた。

そこには予想通り、僕と夏目の名前があった。それも三位。一位、二位は男女カップルで、一位は男性の容姿が良く、女性は中の下というところで、二位はその逆だった。三位に僕達というのは、小百合と智哉が知られていることからの結果だろう。これが、夏目が『僕に向かってくる』と言っていた理由か。

いつ撮ったのかわからない写真に、僕の平凡な顔が写っていた。これで、僕は名前も顔も不特定多数に知られる。

「消去法かな」

「なんで夏目くんなのかなー。私も由宇と一緒に良い」

「『似合わない』だよ？」

「『カップル』でしょ？」

確かに、と頷くと、小百合は楽しそうに笑った。『カップル』に妙に拘っている。

下の順位を見ると、やはり大学ということもあって、バラつきがあった。僕と同じように、同性カップルも何組か挙がっていた。本当のカップルは何組あるのか甚だ疑問だ。

あとのランキングは取るに足りないものばかりだった。好きな学食メニユーなど、学校特有のものが調べられていた。別に興味ないし。

小百合は次に行きたい所が決まっているようで、案内地図の一点を指した。

「ここに行きたい」

「『お化け屋敷』ですか」

「…好きだよね」

夏目と智哉は溜息を吐いた。僕も釣られて苦笑する。

小百合はオカルト系には異様に興味を示した。『あの事件』は、オカルトな要素が多く出てきたため、最終的な謎解きのような解決は小百合にピッタリだった。学祭のお化け屋敷なのだから、高いレベルは望めないが、小百合はそれでも見てみたいのだろう。

「僕は良いけど。どうする？」

「私と由宇が良ければ全て良し！」

どんな理屈だ。呆れて智哉と夏目を見ると、二人は不満を言うことなく苦笑いをして承諾した。少なからず興味があるのかな。お化け屋敷といっても、入ってみたいとどういったものかはわからない。大きく日本風、西洋風にも分かれる。

二分くらい歩いたところで、そのお化け屋敷がある校舎へと辿り着いた。小さい校舎だが一、二階全体を使っているため、規模は大きい。入り口からはどの系統のお化け屋敷かわからない。

何か少し気になってきた。

「二人一組で入るみたいなんだけど、私は由宇と入るねー」

小百合は僕の腕を引いて入り口へと向かった。自然と智哉と夏目が組むことになった。小百合が入場料を払おうとしているのを制して、僕は四人分払った。学祭でやっているものは値段が安い。別に大した出費じゃなかった。それなのに、小百合と智哉、夏目はそれぞれに感謝の言葉を言った。

だから照れるって。

「じゃあ、お先に」

五分後に入る智哉と夏目に軽く手を振った。それに夏目は同じように手を振り返し、智哉は優しい微笑で応えた。

小百合が掴んだ手に、決心が鈍りそうになった。もう、こんな穏やかな状況はありえなくなる。

4・暗闇の、中で

「和洋折衷ってところね」

小百合は仕掛けを悉く無視していった。入った途端に照明は淡くなり、進行方向が蛍光塗料で示されているのがはっきりと見える。小百合は先を歩いていった。繋いだ手は離れない。

和洋折衷と評したように、フロアによってお化けの種類が違いうだ。初めの方は日本のものようだった。こんにやくが頬に当たりゾクツとしたが、恐怖を感じるものではない。先を歩く小百合は、角を曲がったところで突然出てきた幽霊を模した生徒に驚くことなく、じつくりと観察して批評をしていた。流石オカルトには詳しい。世界観は布で仕切られていた。そこで小百合は手を離れた。黒い布を除けて進むと、そこは西洋の内装になっていた。透けて見える貴族風の女性は、映写機が何かで映しているのだろう。これは怖いというより不思議な感じた。幽霊洋館、というような印象を受ける。小百合はそこにある小物を手に取って検分していた。ああ、だから手を離れたのか。

「安物だけど、ここには合っているわね」

「小百合、お化け屋敷を違った意味で楽しんでるね……」

アンティークの小物は偽物のようだが、それでもそれなりには見えた。小百合は満足したのか、すたすたと先に進んでいった。

また仕切りがある。小百合は先に行っている。その布の先には小百合がいるはずだった。

しかし、その布の先には扉があった。ノブを回してみても開かない。ここからは先は一人で行くということか。それなら、時間が経てば開く。思ったとおり、扉は自動に開いた。

先には階段があった。二階も全体的に使っているはずだから、昇るのは当たり前と言える。足下を照らす小さな豆電球の光だけを頼りに歩いた。この明るさなら、踏み外して怪我をすることもないだ

ろう。また、仕切りの布が現れた。それを軽く払う。

何も見えなかった。真っ暗で、小さな光さえない。加えて静まり返っていた。床にも布が敷いてあるようで、今までとは違う感触がした。壁にも布が掛かっているようで、ざらざらした手触りを感じながら、壁伝いに歩いていった。これは、嫌な怖さだ。

「お前は自分に価値があると思っっているのか？」

どこからか、声が聞こえた。機械で変えた低い、耳障りな声だ。これがここの仕掛けか。

自分の価値なんて自分で測れるものではない。だからこそ、いつも迷っている。

「からかわれているのに気付かないのか？」

誰に言っている？ これは前に言われたことがある。…『あの事件』で言われた。

一歩一歩が重くなってきた。

「好きだと言われて浮かれているのか？」

浮かれてなんていない。ただ、信じているだけだ。疑うのはいつでもできるから、今は信じていたかった。小百合と智哉を、裏切る形で離れたくなかった。

「お前はあの二人に合わない」

…僕のことだ。録音テープを流しているのかと思っただが、これははっきりと僕のことを言っているのだとわかる。そして、この情報は『あの事件』を知っている人にしかわからない。ランキング集計の際、小百合と智哉のことを調べたときに行き着いたのだろうか。二人が僕のことを好きだと言ったことまで知っている。

「消えろ」

さっき言われた。まさかお化け屋敷で聞くことになるとは。死んでいる人に「消えろ」と言われても、と軽く考えようとしたが無理だった。吐き気とともに頭痛が襲った。

「お前なんか、いらぬ」

全否定された。いらぬ。それは僕が一番苦手とする言葉だった。

不必要。無くていいモノ。無価値。

必要とされたいから、夏目を助けるフリをしているのかもしれない。そんな自己嫌悪が頭痛を酷くした。

「だから…今日決着をつけるんだ…」

力無く、前に触れた布を捲った。まだ、小百合はいなかった。

5・答えを、見つけた

一面に広がるのは鏡だった。迷路のようになっていたものではなく、ただ両方の壁一面に鏡があつた。何重にも映し出され、それは無限のように思えた。出口が見えない。

汗が吹き出た。この汗は冷や汗だ。量が異常だった。一歩歩くごとに僕の虚像は増えていく。それに比例して身体が重くなっていくのを感じた。

少し休もうと、床に膝を付いた。汗が床に雫となつて落ちていく。「自分が大切なだけのくせに」

また、あの声が聞こえた。頭の中をぐるぐると回る悪意の滲む声。そう、僕は純粹なんかじゃない。小百合と智哉は純粹だと言っただけで、それは間違いだ。

何が正しいかなんて、もうわからない。

智哉。

「なぜお前があのだ二人と……」

「それは僕がいたいからだよ」

澀んだ声を断ち切るかのように、声が重なつた。幻聴かと思つた。今ちようど思い浮かべていたから。

鏡には智哉が映つていた。後ろを振り向くと、確かに智哉はいた。手を伸ばすと、当然のように受け取ってくれた。

小百合とは違ふ体温と感触。何度も触れたことのある手は、今になつて触れた箇所から熱を帯びた。

僕が望んでいたのは、この手だ。

「真弓の次は周防か？ 汚らしい」

ビクツと震えたのが手から伝わつたのか、智哉はしゃがんで僕の背中に片手を回した。温かった。繋いだ手も、回された手も、どちらも優しかった。

縋ると、戻れなくなりそうだった。

「由宇は僕達にとって必要不可欠なんだ。由宇がいなければ、今の僕達はない。由宇が汚いだって？ 自分のことは綺麗だと言えるの？」

声は沈黙した。誰だって、汚い部分を持っている。それが無いという人は、ただ無自覚なだけだ。欲がなければ人は生きてはいけない。そこに犠牲は必ずある。食べることで、何かを犠牲にして成り立っている。

人が人を否定するのなんて、根本的には無理なんだ。程度の差はあるから、罪人は裁かれる。ただ、それだけのこと。

「由宇、大丈夫？」

「大丈夫…じゃない。心理的にはマシになったけど、汗を掻いた分、水分が抜けて体がたるい」

立ち上がる気力がなかった。まだ鏡に囲まれていて、嫌な汗が出た。今更ながらに気がついたが、智哉に寄りかかっていたら汗が智哉についてしまう。慌てて離れようとしたのを、智哉は手に力を込めることで抑えた。

「何？」

「いや、僕の汗がすごいから離れた方が良いかないと」

「動けないくせに何言ってるの。この状態は嫌？」

「正直言って、かなり楽」

支えられている、というのが感じられて、本当に楽になった。心理的なものは不安が取り除かれると身体が軽くなる。しかし、今回は水分がかなり抜けたせいで、身体を動かすのが億劫だった。少し脱水症状に近い。

智哉は携帯電話を取り出し、短縮でどこかにかけた。

「夏目くん？ 由宇が気分悪くなったから、休養室に運んでもらえる？ …じゃあ、今から出口に向かうから」

通話は終了し、智哉は電源を切った。遣り取りからわかるのは、夏目に電話をしていたことと、これからのことについて話していたということだ。

「夏目？」

「うん。僕が運べたらいいんだけど、同じ体格だからね。夏目くんが運んでくれるそうだから、とにかくここから出よう」

智哉は背中に回した手で反対の脇を掴んだ。自然と繋いだ手は外れた。手持ちぶさたの手を開いたり閉じたりしていると、智哉はくすりと笑った。

「不安？　じゃあ、こっちの手を持っておいで」

脇の下からひらひらと振られる手を掴んだ。言われたとおり、不安だったようだ。智哉の手に触れていると、あの恐怖は襲ってこない。

少し回復したのが見て取れたのか、智哉の合図で立ち上がった。

うん、なんとか歩ける。とにかくここから出ないと、とりあえずの解決にはならない。早く、この無限に見える道から離れないと。

「もう、終わったんだよ」

智哉は安心させるために言ったのだろう。でも、そうは思えなかった。

何も終わっていない。ただ、智哉に助けられただけ。そして、智哉のことが好きだと気付いただけ。

これは始まりにすぎない。

6・一つの、答え

目を開けると、蛍光灯の点いた天井が見えた。最後に見たのは、校舎を出たすぐのところまで夏目と小百合が待っていたところだ。心配そうな表情の二人を見た途端、力が抜けた。同時に意識も失ったのだろう。夏目が手を伸ばすのが視界に過ぎった。

「ここは…？」

「保健室よ」

近くから小百合の声が聞こえた。どこにいるのかと顔を横に向けると、すぐ近くに小百合はいた。僕はベッドに寝ているようで、小百合は高さからすると、椅子に座っているのだろう。

小百合から視線をずらすと、小さな個室にすることがわかった。

特設の休養室といったところか。夏目と智哉の姿はない。

「夏目くんは外で待っているわよ。見られたくないでしょ？ 弱っている姿なんて」

その通りだった。親が子供に弱い姿を見せたくないのと同じだ。

絶対的に保護する立場の者は強くてはならない。たとえ、外見だけでも。

無言を同意と取ったのか、小百合はフツと笑った。少し悲しそうな笑顔なのが気になる。

そして、智哉はどこにいるのか。

「小百合？」

「由宇、あなたのことが好き」

また突然の告白だった。前は智哉と同時にされたが、今回は一人だった。ああ、だから今、小百合は一人でいるのか。

「…ごめん」

数時間前に用意した台詞を声に出した。それは予想されていたように、小百合はさっきと同じ悲しい笑みを浮かべた。

「わかってたの。私は夏目くんと同じだったから。ただ、甘えてい

ただけだったから。そんな私は恋愛対象にならないのは当然よね。さつき夏目くんに由宇の決心を聞いたの。だから、ね」

だから今言った、ということか。納得したら安心して、ふっと目を閉じた。あれこれ悩んでみても、答えは一つしか用意されていなかった。今は小百合がまだ僕のことを好きだということが確認できて良かった。僕はそれを受けることができなかったけど。

ふと、唇に柔らかいものが当たったのを感じた。慌てて目を開けると、そこには小百合の顔があった。近い。

今、僕は小百合にキスされている。

それは数秒のことだったはずだが、長く感じられた。不思議と、快感も不快感もない。離れた唇は、後に何も残さなかった。

「思い出にね」

小百合はいつものように笑った。嘘で塗り固められていない表情。小百合にとっては良い結果じゃなかったはずなのに、それでも笑っている。

救われた気がした。小百合も、僕から離れたりはしない。

「友達でいてくれるの？」

「もちろんよ。私は怖かったの。もうそばにいれなくなることがね。でも、恋人じゃなくても由宇といれるなら友達で良かった」

「僕は君が夏目の位置で好きだったから、離れたくないのは同じだよ」

つまりは家族のようなもの。小百合は言外の言葉を理解したようだった。本当に、夏目と小百合は、本当の弟妹と同じような感覚で付き合っているような気がする。実弟も僕に甘えているから。案外、家族の方が恋人よりも良い関係なのかもしれない。家族には終わらない。

でも、僕は恋愛として自覚している人がいる。

「じゃあ、そろそろ行くわね。また、後処理はまかせておいて」

また、というのは『あの事件』と同じように、ということだろう。あのときも小百合は上手く事を収めた。小百合にまかせておけば確

実だ。

もう少し休んでいてね、と小百合は言い残してドアを閉めた。静寂が辺りを包んだ。まだ完全に回復していないことは身体の重さからわかる。また小百合が迎えにくるまで寝ていようと決めた。

目を閉じて暫くすると、ドアの開く音が聞こえた。

「小百合、何か忘れ物？」

「小百合は夏目とどこかへ行っただけ」

聞こえた声に慌てて体を起こした。急に起きたために一瞬頭がクラツとする。勢いのままに倒れるな、と思っていたのにその衝撃はこなかった。背中に感じるのはあの手の感触だけ。

「なんでそんなに驚くかな」

呆れたような、苦笑を滲ませた智哉の声は耳に心地良かった。これが恋心というものか。照れを隠しながら、なんとか支えられながらも体を起こした。

背中に枕を挟んで凭れると、体勢は楽になった。寝るのにも体力を使う。もう起きている方がいいみたいだ。

ほっとして智哉の顔を見ると、智哉の視線は口元にあった。凝視していると言っている。

「智哉？」

「小百合とキスした？」

返事に詰まったのを見て、智哉は溜息を吐いた。隠していても仕方ない。別にやましいことではない。…多分。

「うん」

「口紅が付いてる」

ここ、と智哉は自分の唇に人差し指を当てた。唇に小百合の口紅が付いていたら、その付いた経緯はすぐに推測できる。

その唇を拭うことなく、口元に笑みを浮かべた。

「小百合に告白された。夏目に僕の決心を聞いたらしくてね」

それでどうしたのか、という智哉の無言の問いに笑みを深くして答えた。つまりは無回答。

今ははぐらかしておく。智哉も夏目から聞いているはずだから、これからの行動は智哉次第だ。目だけで、智哉に発言を促した。

たとえば、智哉の答えが僕の望むものでなかったとしても後悔はない。

7・最後の、最後

「僕は由宇が好きだよ」

「うん、僕も君が好き。もちろん、恋愛感情として」

僕が望んだ智哉の告白に、即答した。その答えは意外だったらしく、智哉は珍しく驚いた表情を見せた。恋は盲目というところか。そんな智哉の一面を見られて嬉しかった。

智哉は何とか言葉を続けた。少し声が震えているように感じるのは気のせいか。

「さつき小百合とキスしたのは…？」

「それだけ。思い出に、って不意打ちで」

「じゃあ、本当に？」

「うん。わかったのはついさつきなんだけど。智哉こそ、二年も経ってまだ好きでいてくれるんだ？」

正直な感想だった。二年も中途半端に友達の間係を続けていたけど、その中にずっと恋愛感情があったなんて。小百合もそうだったようだが、智哉も同じだったなんて。

気の抜けた表情で笑みを浮かべると、智哉は突然僕の肩に額を置いた。

「当たり前だよ。君は変わらなかったから。僕が好きな由宇のままでいてくれたから。簡単に変わるはずがない」

「…ありがとう」

素直に感謝の言葉が出た。気付くのが遅かったけど、このタイミングで良かったのかもしれない。夏目の両親が亡くなって、夏目は弟のような位置にいることになり、小百合の我が儘に付き合うのも妹がいるみたいで楽しかった。

ただ、智哉だけは僕に甘えなかった。何かをしてくれ、という頼みはなかった。だからこそ、智哉は僕が弱っているときに支えてくれる存在になっていたのかもしれない。それは、当然のように恋愛

感情を含んで。

「由宇は僕の恋人だと思っでいい？」

「もちろん、思っでほしいよ。もう、逃げない」

そう、もう逃げることなんてない。また智哉の側にいて悪意が僕に降りかかってこようと、智哉から離れる選択肢はなかった。頭痛がしても、気分が悪くなっても耐えられる。そんな僕を智哉が好きでいてくれるなら、もう何も望みはしない。

智哉はゆっくりと顔を上げた。交差する瞳の中に、妖しい光が見えた気がした。

「キスしていい？」

「いいよ。もう遠慮しなくていいから」

僕の許可に、智哉は僕の頬に手を置いた。それは顎へと辿り着き、そつと固定する。そして、顔を近づけた。ゆっくりと迫ってくる整った容姿。じつと見ているのも不躰かな、と目を軽く閉じた。

重なるのは唇と想い。小百合のときとは比べようもないほど、身体の中で変化があった。言葉にすれば快感。でも、それ以上の何かがあるにはあった。小百合の痕跡を無くすかのように角度を変えて執拗に重ねられる唇は、甘い吐息を誘った。奪われ、支配されるのもいいかもしれない。それが智哉であるならば。

それは、二年の想いを表しているように感じられた。

幸せだと思っだがそれは精神面でだけで、まだ回復していない体は重く感じた。

それに気付いたのか、智哉は僕の背に手を回して支え、そつと横に寝かせて軽く掛け布団を乗せた。ぽんぽん、と優しく叩く。

「もう少し休んでいた方がいいね。小百合が迎えに来るまで、僕はここにいますから」

智哉は優しい笑みを浮かべて僕の髪を梳いた。安心できた。これから、僕はこの手と一緒にいれる。先程のように、僕の知らない感覚を呼び覚ます手。安心させる手。その全ては、智哉だからという結論の上で成り立っている。

確実に、僕も二年の間に智哉への想いを成長させていた。

「ありがとう」

眠りに引き込まれる前に、これだけは言いたかった。重い瞼はそのまま視界を閉ざし、安らかな睡眠へと導いていった。

五感で感じるのは、近くににいる智哉のことだけ。

「由宇が幸せなら、僕も嬉しいです」

夏目は本当に嬉しそうに言った。隣で小百合は困ったような笑みを浮かべていたが、負の感情は見えない。

あれから一時間ほど経った後、小百合と夏目が休養室のドアを叩いた。二人は何も言わないでもわかったようだ。大分回復していたから、智哉と一緒に二人と合流した。小百合は宣言したとおり、全てに收拾を着けてきたようだった。廊下を歩いていてすれ違った人々は、僕を見て驚いた表情をしたり、薄く微笑む人までいた。なんか、同情されている気がする。

一体何をしたんだ。

「小百合、どうやって処理したのか教えてくれる？」

「まずはあのランキングを外させた。それから、由宇は重い病に罹っていて、私たちが側で看護しているって噂を流したの」

「なんというか…当たらずとも遠からず、だね」

重い病は、悪意を溜め込む性質のことを指しているのだろう。まあ、四人でいるのは看護だとは言えなくもない。嘘は言っていないが、誇張し過ぎている。さすが小百合というべきか。

小百合とその場にいた夏目は、苦笑して続けた。

「見事な手際でしたよ。由宇のため、と気を張っていたのでしょう。休養室から出てきたときは泣きそうな顔をしていましたが、すぐに顔を引き締めていました」

「夏目くん！」

泣きそうな顔をしていた。小百合が？ と疑問に思ったが、小百

合でも傷付くことがある。僕が傷付けた。それなのに、僕のために事を収めてくれた。

小百合、君は夏目くらいに大切なんだ。

「由宇、わかってるの。私のことも大切に想ってくれていることはだから、気にしないで」

「小百合、有難う」

智哉は小百合にふっと笑みを浮かべた。今までは同朋の二人だったが、僕の選択で分かれた。僕が崩した二人の関係。

崩れた、と思っていた。

「まあ、なんとなくわかってたからいいの。由宇が選んだのが智哉で良かったわ」

戦友、とでもいうところか。小百合は智哉の差し出した手を軽く叩いた。パンツという高い音は、変わらない友情を示しているように聞こえた。

表面上では何も変わっていないように見える僕達の関係。しかし、内部で確実に変わっていた。それは、僕が望む形に。

最後の最後、僕は運命に逢った。

（もう一つの、選択）

「僕は由宇が好きだよ」

「…ごめん」

用意していた答えなのに、また躊躇った。結論は出したはずだ。そして、今は小百合も離れていかなことがわかつている。それなのに、智哉までを望んでしまうなんて。恋愛の『好き』は返せないのに。

なんて欲深いんだ。

「わかつてる。僕は友達なんだよね」

「…うん。夏目と小百合は弟や妹みたいな感じなんだけど、君は友達なんだ」

「それでいいよ」

智哉の優しい声に、思わずじっと見てしまった。それで許してくれるのだろうか。二年も待たせて、その結果が友達でいてほしい。なんて自分勝手なんだろうと思うのが普通だろう。

そんな疑問はお見通しのうちに、智哉は苦笑した。

「君は変わらなかったからね。僕が好きな由宇のままでいてくれたから。だから、このまま友達なのかな、って感じてた。だから、僕も友達としての感情に置き換えてきたんだよ」

「…ありがとう」

素直に感謝の言葉が出た。結論を出すのが遅かったけど、このタイミングで良かったのかもしれない。夏目の両親が亡くなって、夏目は弟のような位置にいることになり、小百合の我が儘に付き合うのも妹がいるみたいで楽しかった。

ただ、智哉だけは僕に甘えなかった。何かをしてくれ、という頼みはなかった。だからこそ、智哉は僕が弱つているときに支えてくれる存在になっていたのかもしれない。それは、横の友達の位置として。

「親友だと思っていいい？」

「もちろん、思ってたほしいよ。夏目以上の親友だと」

そう、もう答えは出た。また二人の側にいて悪意が僕に降りかかってこようと、二人から離れる選択肢はなかった。頭痛がしても気分が悪くなっても耐えられる。そんな僕を二人が好きでいてくれるなら、もう何も望みはしない。

智哉はゆっくりと顔を上げた。交差する瞳の中に、妖しい光が見えた気がした。

「じゃあ、思い出に小百合みたいにキスしていい？」

気持ちに決着をつけるということか。小百合もそうして何かを吹っ切ったようだったし。

そして、それを拒む理由もなかった。

「いいよ。それが望みだったのなら」

僕の許可に、智哉は僕の頬に手を置いた。それは顎へと辿り着き、そつと固定する。そして、顔を近づけた。ゆっくりと迫ってくる整った容姿。じつと見ているのも不躰かな、と目を軽く閉じた。

重なるのは唇と想い。夏目とも小百合とも違う、横に位置する友達。横ということは恋人に近いのかもしれない。でも、それは違うとはつきりとわかる。

今は恋愛なんてしなくても、この四人の距離が心地良かった。ゆっくりと唇は離れた。

そして、智哉は僕の背に手を回して支え、そつと横に寝かせて軽く掛け布団を乗せた。ぽんぽん、と優しく叩く。

「もう少し休んでいた方がいいね。小百合が迎えに来るまで、僕はここにいますから」

智哉は優しい笑みを浮かべて僕の髪を梳いた。安心できた。これから、僕はこの手と一緒にいれる。夏目と、小百合と、智哉。いつかは離れるとしても、今だけは確実に側にいる。それだけが真実だった。

「ありがとう」

眠りに引き込まれる前に、これだけは言いたかった。重い瞼はそのまま視界を閉ざし、安らかな睡眠へと導いていった。五感で感じるのは、近くにいた智哉のことだけ。

「由宇が幸せなら、僕も嬉しいです」

夏目は本当に嬉しそうに言った。隣で小百合は困ったような笑みを浮かべていたが、負の感情は見えない。

あれから一時間ほど経った後、小百合と夏目が休養室のドアを叩いた。二人は何も言わないでもわかったようだ。大分回復していたので、智哉と一緒に二人と合流した。小百合は宣言したとおり、全てに收拾を着けてきたようだった。廊下を歩いていてすれ違った人々は、僕を見て驚いた表情をしたり、薄く微笑む人までいた。なんか、同情されている気がする。

一体何をしたんだ。

「小百合、どうやって処理したのか教えてくれる？」

「まずはあのランキングを外させた。それから、由宇は重い病に罹っていて、私たちが側で看護しているって噂を流したの」

「なんというか…当たらずとも遠からず、だね」

重い病は、悪意を溜め込む性質のことを指しているのだろう。まあ、四人でいるのは看護だとは言えなくもない。嘘は言っていないが、誇張し過ぎている。さすが小百合というべきか。

小百合とその場にいた夏目は、苦笑して続けた。

「見事な手際でしたよ。由宇のため、と気を張っていたのでしょう。休養室から出てきたときは泣きそうな顔をしていましたが、すぐに顔を引き締めていました」

「夏目くん！」

泣きそうな顔をしていた。小百合が？と疑問に思ったが、小百合でも傷付くことがある。僕が傷付けた。それなのに、僕のために事を収めてくれた。

小百合、君は夏目くらいに大切なんだ。

「由宇、わかってるの。私のことも大切に想ってくれていることはだから、気にしないで」

「そうだよね」

智哉は小百合にふっと笑みを浮かべた。

戦友、とでもいうところか。小百合は智哉の差し出した手を軽く叩いた。パンツという高い音は、変わらない友情を示しているように聞こえた。

表面上では何も変わっていないように見える僕達の関係。しかし、内部で確実に変わっていた。それは、僕が望む形に。

最後の最後、僕は運命に逢った。

（もう一つの、選択）（後書き）

本編は『最後の、最後』です。この話はどちらも選ばなかった、という選択もあったということを書いてみたものです。

おまけ：数年後（前書き）

由宇と智哉は同居しています。

おまけ：数年後

誇りに思ったり、優越感を覚えたこともある。だけど、それ以上の独占欲があるから。

「またあの倶楽部に行ってたんだ？」

玄関に座り、靴を脱いでいると後ろから声がかかった。あはは、と笑って振り返った。

「報告にね。雑談込みだけど」

「…君は比較的綺麗な人に好かれやすいんだから、自覚してくれないと」

智哉は溜息を吐いた。それに対して苦笑しかできなかった。

智哉もその分類に入る。出会った頃は可愛い感じだったが、五年経って大学生となった今ではカッコよくなっていた。

智哉が差し出した手を取り、立ち上がった。

「それを自覚したら、僕って嫌な奴じゃない。綺麗な人に好かれるなんて」

すぐに手を離し、リビングへと向かった。智哉も後に続く。

「もう少し嫌な奴になってくれると助かるんだけど」

智哉の溜息混じりの呟きに、苦笑した。

嫉妬している。確かによく遊びに誘われたりするけど、智哉という時間の方が多い。

嫉妬するだけ無駄なのに。

リビングに入り、コートを脱いだ。

「僕がそんな奴だったら、君は好きにならなかったんじゃないかな？」

返事を聞かずに荷物を置きに自分の部屋へ向かった。逃げに見えたかもしれない。智哉はそれを見て、夕食の準備に取り掛かった。料理はできているのでテーブルに運ぶだけだ。部屋から出てきたと

きには全て整っていた。

「炊き込みご飯だ」

嬉しそうに席に着くと、智哉は微かに笑みを浮かべた。

「君を好きになった理由には関係ないよ」

手を合わせていただきます、と言った後に続けた。

「性格じゃないってこと？」

「性質ってこと。一目惚れじゃないし。本質的な公平さが好きになった理由だよ」

本質的な公平さ。僕が外見で判断しないことを表していた。綺麗な顔だからといって特別扱いしない。その公平さが嫌いな人には嫌われるが、容姿が良いと自覚のある人は惹かれる要素となる。

「そういう君こそ、僕のどこを好きになったの？」

智哉の疑問に、箸を口に含んだまま苦い顔をした。何度か聞かれたことがあるが、いつも曖昧にできていた。嘘は言っていないが、隠していることがある。

「料理の腕、とか」

「それだけ？」

智哉は不機嫌そうな顔をしながらも、声は楽しそうだった。

伝えられなかったことを、今、正直に、真実だけを。

「初めてだったんだよ。頼られなかったのは。家では兄としてしっかりしてないといけないし、外ではその公平さ故に甘えられる。その中で、智哉だけが『頼っていい』って言ってくれたんだよ」

一気に言ってから視線を逸らし、味噌汁に口を付けた。それだけのことで、と思われるかもしれない。でも、それだけで良かった。他の理由は後付けにすぎない。

何も言わない智哉を訝しんで顔を上げた。そして思わず息を呑んだ。

「…何、その顔」

「いや、由宇らしいと思って。好きだなんて」

満面の笑みのまま言った智哉に苦笑いを返した。

好きの言葉が嬉しいのは智哉だから。こんな顔をさせられるのは自分だけだから。

「頼るのは僕だけにしてよね」

笑みを浮かべたまま近付いてくる顔と手に、ゆっくりと目を閉じた。

おまけ：数年後（後書き）

「倶楽部」は「サイコロジ―倶楽部」で、定期的に夏目の近況報告に行っています。（『運命と言つ名の奇跡』参照）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1062d/>

最後の最後に逢う運命

2010年10月8日15時49分発行